

高校陸上競技部のモラルに関する研究

Management of Track and Field Team in Senior High School
from the Viewpoint of Morale鶴山博之
TSURUYAMA Hiroyuki

I. 緒言

総合型の地域スポーツクラブの活動が各地で盛んになっているものの、我が国の競技スポーツは、依然として学校運動部によって多くの部分支えられているといっても過言ではない。また部活動は学校教育の重要な構成要素となって定着していて、学校の活性化の上で部活動は不可欠な文化である（内海、1998）ことも事実である。

運動部はスポーツ活動を中心とした個人の集まりで、共通な目標や活動を持ち、メンバーに対面的な相互依存関係が存在し、我々の集団であるといった意識を持ったものである（松田、1975）。これら運動部はその成員の構成、種目、目的などその内容には大きな違いが認められる。これら運動部には多くの場合、監督、コーチが存在し、その指導方針や競技に対する価値観、考え方、練習方法（施設、時間、内容）により、部の雰囲気はかなり異なってくるものと考えられる。つまり多くのスポーツ集団はそれぞれの成員や組織が異なり、他の組織と異なったスポーツ集団としての固有性ととも、それぞれのスポーツごとの個別性も持ち合わせているといえる。それらの集団にはリーダーが存在し、組織の運営およびスポーツに関する技術指導などを行っているが、それぞれの組織に対して個別のマネジメントが必要であるというのが現実的であり（鶴山ら、2001）、リーダーシップに関する研究も多くなされてきている。

モラルとは本来軍隊の士気を表し、集団の団結力、結集度あるいは集団意識、集団精神、自発的な共同意欲を表している（賀川、1983）。竹村ら（1963）は「運動部のモラルは部員が部の目標に積極的な意義を感じ、強く結束してその目標達成のために協力する集団機能である」としていることから、部員のモラルが高いことは部全体の目標達成のためにも望ましいことであると考えられる。

井田（1967）は強い運動部集団の機能性特性として比較的強固な学年単位の結合を示し、部全体でも高い凝集性を持つことを報告している。また賀川（1983）は「凝集性の良さが、直接的・間接的にチーム全体のモラルに影響を及ぼすことは容易に考えられるであろう」としている。

高いモラルが生まれるためには、集団活動の中で個人的な目標を持ち、その達成とともに集団の目標も達成できる、あるいは集団の目標を達成することが個人の目標も達成することになる

と認知されることが必要である(松田、1983)。

運動部の多くは競技会で良い成績を上げることが多く、丹羽(1976)は「運動部における権限構造と目標成就の機能について部員外型が最も戦績が良い」としている。高校運動部では教員が技術指導から組織の運営まで担っている場合がほとんどであるので、この点では集団のモラルを高揚させるには適しているといえる。

賀川(1983)は「モラル育成のためには、その状況とその時機に応じて監督・コーチなどの指導者が肌で感じたことをどのように表現するか。また次に予測される場面への視覚的・心理的リーダーシップの表現方法に左右されるわけであるが、ややもすると監督・コーチはスポーツの勝負に勝つという一点に集約してコーチングする傾向から、選手の主体性と多様性を見落としがちになる。」としている。つまりモラルの育成のためには、チームとしてのまとまりに配慮するとともに、選手それぞれの個性に応じたマネジメントが求められる。

多くのスポーツ集団はそれぞれの成員や組織が異なり、他の組織と異なったスポーツ集団としての固有性ととともに、それぞれのスポーツごとの個別性も持ち合わせている(筆者ら、2001)。多くの場合、それらの集団にはリーダーが存在し、組織の運営およびスポーツに関する技術指導などを行っているが、それぞれの組織に対して個別のマネジメントが必要であるというのが現実的であり(筆者、2010)、リーダーシップに関する研究(Chelladuraiら、1980)(松原、1990)(三隅、1973)(永井ら、1998)(野崎ら、1989)(杉山、2000)は多くなされてきている。

陸上競技は典型的な個人競技であり、パフォーマンスについても客観的評価がしやすい。また集団で練習を行っても、主体はあくまで個人であるという特徴がある。筆者ら(1994)は女子体育大学陸上競技部でのモラル研究を行ったが、学年、ブロック(トラック競技、フィールド競技)ごとにモラルに差が認められた。しかし体育大学と高校とでは、集団の年齢、競技力、モラル、成熟度に違いがあるのは明らかである。ここでは筆者らが女子体育大学陸上競技部を対象にした研究での方法(筆者ら、1994)を用い大学と高校でのモラルを比較検討することから、高校陸上競技部のモラルの実態を明らかにすることにより、求められる陸上競技部の集団機能やその指導のあり方について検討するものである。

II. 研究方法

本研究の調査は富山県内の高等学校陸上競技部員215名(男子123名、女子92名)を対象として行った。調査対象の陸上競技部はいずれも活動が活発であり、競技成績も県内では高いほうの学校である。またそれぞれの学校の顧問(コーチ)はいずれも優れた指導実績がある人たちである。調査の方法はアンケート用紙により行い、調査期間は2007年5月下旬～6月上旬であった。本研究は筆者らが丹羽ら(1972)の20項目のモラル調査に「部内の人間関係」と「部の機能」を加えた22項目を用いて行った先行研究(筆者ら、1994)で得られた因子に該当した12項目を用いた。それらの項目について自己評価させ、分析・考察した。各種目の測定スケールは「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「思わない」「全然思わない」の5段階評定を採用し、5段階順にそれぞれ5、4、3、2、1の得点を与えた。先行研究で得られた因子をそのまま用い、その因子スコアを算出した。因子スコアは因子に相当する項目の平均値を算出し、標準化(標準偏差

が1.0、平均が0になるよう)したものを用いた。

Ⅲ. 結果と考察

1. モラールに関する基本統計

表1はモラールに関する12項目の全体の平均値を示したものである。評価が高かった項目は「部における技術の指導がうまくなされている」(4.298)、「私は部の目標達成のために頑張っている」(4.260)、「部の目標達成のために部員全体が頑張っている」(4.172)であった。

評価が低かった項目は「部の目標が達成されやすい」(3.247)、「部員の不平・苦情がうまく取り上げられている」(3.270)、「現在の部の運営の仕方を部員が支持している」(3.609)であった。これらのことから、技術指導および目標達成についての努力感は比較的高く、それ以外の部のマネジメントについては低い傾向があることが窺われる。

表1. モラールに関する評価

変数	アイテム	平均値	標準偏差
第1因子	一体感		
	部内の上級生と下級生との気持ちが合っている	3.744	0.957
	部の目標達成のために部員全体が頑張っている	4.172	0.880
第2因子	目標達成		
	私は部の目標達成のために頑張っている	4.260	0.720
	部の目標と個人的な目標が一致している	3.795	0.933
	部の目標が達成されやすい	3.247	0.901
第3因子	人間関係		
	部全体としてまとまっていると思う	3.847	0.983
	現在の部の運営の仕方を部員が支持している	3.609	0.967
第4因子	部内でお互いの意見を出し合っている	3.800	0.946
	合理性		
	部員の不平・苦情がうまく取り上げられている	3.270	0.984
第5因子	部の練習計画が能率的に行われている	3.930	0.955
	向上性		
	試合に出れる可能性は将来ある程度ある	4.037	0.929
	部における技術の指導がうまくなされている	4.298	0.838

2. モラルの因子構造とその解釈

筆者ら(2000)が大学陸上競技部を対象に、丹羽ら(1972)の20項目を参考に作成した22

項目を用いて行った先行研究におけるモラルに関する研究で5因子が抽出されたが、それらの因子に該当する12項目をそのまま用い、因子スコアも算出した。

第1因子は部長、監督、他の部員との気持ちなどがどの程度合っているかという項目なので「一体感」の因子として解釈した。第2因子は個人や部の目標達成に関する項目なので「目標達成」の因子として解釈した。第3因子は部内の親密度やまとまりに関する項目なので「人間関係」の因子としてこれを解釈した。第4因子は部内の練習内容や生活についての要求に関する項目なので「合理性」の因子としてこれを解釈した。第5因子は競技会出場の可能性や技術の向上に関する項目なので「向上性」の因子としてこれを解釈した。

3. モラル因子に対する部員の反応

1) 男・女別にみた因子スコア

表2は男女別の因子スコアを比較したものである。その結果、男子は女子に比較して第2因子を除いて因子が高かったが、第5因子を除いて有意な差は認められなかった。「F5: 向上性」において男女間に有意な差が認められたことから、男子のほうが技術を向上させ、試合で良い成績をとりたいという意欲が強いと考えられる。

表2. 男女別因子スコアの比較

因子	男子	女子	T-値	P	
F1: 一体感	0.016	-0.022	0.274	0.784	N.S.
F2: 目標達成	-0.070	0.093	1.181	0.239	N.S.
F3: 人間関係	0.023	-0.031	0.391	0.696	N.S.
F4: 合理性	0.063	-0.084	1.068	0.287	N.S.
F5: 向上性	0.126	-0.168	2.143	0.033	*
N	123	92			

* P<0.05 N.S. no significant

2) 学年別にみた因子スコア

学年別に因子スコアを比較してみると(表3)、1年生が2、3年生に比べ、どの因子についても高い傾向が示された。しかも1年生から2年生の段階で急激に低下していることが認められた。これらのことは、筆者がリーダーシップについて同じ選手を対象にして行った研究(2009)でもほぼ同様の傾向が認められた。有意な差が認められたのは第1、2、3因子についてであり、こ

表3. 学年別因子スコアの比較

因子	1年生	2年生	3年生	F-値	P	
F1: 一体感	0.280	-0.006	-0.321	7.695	0.000	***
F2: 目標達成	0.224	-0.060	-0.217	4.131	0.017	*
F3: 人間関係	0.414	-0.268	-0.292	14.01	0.000	***
F4: 合理性	0.263	-0.025	-0.071	2.238	0.646	N.S.
F5: 向上性	0.076	-0.025	-0.071	2.238	0.946	N.S.
N	87	53	75			

*** P<0.001 * P<0.05 N.S. no significant

これらのことから1年生は「人間関係を重視し、部全体が一体となって、部の目標を達成しよう」という姿勢が強く認められる。2、3年生についてはそのような傾向があまり認められず、部全体のことよりも個人を重視する傾向があるのではないかと考えられる。1年生は入部間もないため、高校における中学に比べより専門的な練習・指導を新鮮に感じていることも影響しているとも考えられるが、自ら目標や課題が設定できるようになっていると思われる2、3年生に対しては、1年生とは異なるマネジメントの必要性があると考えられる。

陸上競技は典型的な個人競技であり、競技に対する考え方、価値観、部全体についての考え方がそれぞれの部員間でかなり異なっていると考えられる。それだけに個人の主体的活動を尊重しつつ、部全体がまとまって目標に向かって努力する態度を育てるような細かな配慮とトレーニング指導を行うといった難しいコーチングが求められる。

3) 専門種目別に見た因子スコア

専門種目別に因子スコアを比較したところ、専門種目による違いは認められなかった。大学陸上競技部における専門種目間の比較では、トラック種目とフィールド種目の間にモラル、リーダーシップについて明確な差が認められている。(筆者ら 1994、1996、1997) 高校陸上競技部と大学陸上競技部との間に明確な差が認められたことは、練習形態の違い(大学では短距離、中長距離、跳躍、投擲などのブロックごとによる練習が行われるのに対し、高校ではウォーミングアップ段階までは全員一緒に行うことが多い)によるものであると考えられる。つまり大学ではそれぞれのブロックに異なるリーダーがいてその影響を受けるのに対し、高校では一人のリーダーが全般にわたって指導する場合が多く、そのためリーダーシップ同様モラルについても専門種目の違いによる差が認められなかったと考えられる。

4) 学校別に見た因子スコア

表4は学校別の因子スコアを示したものである。学校別の因子スコアの比較ではすべての因子において0.1%水準で差が認められた。佐藤(1995)は高等学校陸上競技部におけるリーダーシップスタイルについて「指示型」「委譲型」「厳格型」に分類され、競技意欲と指導スタイルは関係が強いとしているが、「F1:一体感」において高い値を示したF、G、H校の指導者のコーチングスタイルを日ごろから観察すると、佐藤の示した「指示型」「委譲型」の中間に相当するようと思われる。G、H校は対象校の中でも部員数が多く上位の競技成績を示しており、モラルの高さが競技力向上と結びついているのではないかと考えられる。部員数が多く全体的にモラル因子が低かったA、I校はリーダーシップスタイル因子についても全体的に低いことが認められ(筆者2010)、リーダーシップとモラルとの関係が窺われる。

表4. 学校別因子スコアの比較

因子	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校	I校	F-値	P	
F1: 一体感	-0.491	0.126	0.030	0.051	-1.887	0.737	0.465	0.678	-0.182	9.456	0.000	***
F2: 目標達成	-0.346	-0.094	0.132	-0.160	-0.584	0.334	0.537	0.653	-0.364	4.570	0.000	***
F3: 人間関係	-0.509	0.052	-0.021	0.402	-1.331	0.557	0.324	0.760	-0.430	9.023	0.000	***
F4: 合理性	-0.037	0.110	0.307	-0.282	-1.002	0.209	-0.026	0.657	-0.607	4.584	0.000	***
F5: 向上性	-0.014	-0.156	0.084	0.335	-0.843	-0.100	0.259	0.414	-0.791	4.114	0.000	***
N	57	8	29	28	5	15	19	28	26			

*** P<0.001

5) コーチから受ける影響

表5、6は男女別、学年別にコーチからどのくらい影響を受けているかを示したものである。男女、学年による違いは認められなかったが、コーチから影響を「強く受ける」選手は50%を超え、「まあ受ける」選手を含めると70%を超えることから、高校陸上競技部ではコーチの影響をかなり強く受けていることが明らかとなった。

表7はコーチから受ける影響度別に因子スコアを示したものである。5因子すべてに0.1%水準で有意な差が認められた。すべての因子について、コーチの影響を強く受ける選手ほど、モラルが高い傾向が認められた。

大学における選手とコーチの関係と、高校におけるそれとでは、部活動が教育の一環と位置付けられている高校においての方が明らかに時間的にも内容についても密接であるように思える。各校のコーチには様々な指導のスタイルがあると考えられ、どの学校のコーチがどのようなスタイルであるかについての客観的指標はない。しかしコーチから強い影響を受けているほど、モラルが高いことは明らかである。これらのことからモラルの向上にはコーチの存在が欠かせないことが明らかとなった。

表5. 男女別コーチからの影響

因子	男子	女子
強く受ける	56(47.1%)	52(57.8%)
まあ受ける	24(20.2%)	19(21.1%)
どちらともいえない	27(22.7%)	17(18.9%)
あまり受けない	9(7.6%)	2(2.2%)
全く受けない	3(2.5%)	0(0.0%)
N	119	90

$\chi^2=6.56$ DF=4 P<0.16

表6. 学年別コーチからの影響

因子	1年生	2年生	3年生
強く受ける	37(43.0%)	29(58.0%)	42(57.5%)
まあ受ける	25(29.1%)	7(14.0%)	11(15.1%)
どちらともいえない	20(23.3%)	12(24.0%)	12(16.4%)
あまり受けない	4(4.7%)	1(2.0%)	6(8.2%)
全く受けない	0(0.0%)	1(2.0%)	2(2.7%)
N	86	50	73

$\chi^2=12.90$ DF=8 P<0.12

表7. コーチからの影響別因子スコアの比較

因子	強く受ける	やや受ける	どちらとも	あまり受けない	まったく受けない	F-値	P	
F1: 一体感	0.264	0.079	-0.472	-0.665	-0.958	6.822	0.000	***
F2: 目標達成	0.267	0.062	-0.401	-0.642	-0.867	5.863	0.000	***
F3: 人間関係	0.236	-0.010	-0.329	-0.547	-0.983	4.454	0.002	**
F4: 合理性	0.205	0.035	-0.282	-0.638	-1.795	5.978	0.000	***
F5: 向上性	0.136	0.062	-0.198	-0.181	-2.477	6.107	0.000	***
N	108	43	44	11	3			

*** P<0.001 ** P<0.01

6) 競技実績別に見たモラル

表8は競技実績別に見たモラルの比較である。第1、2、3、4因子については競技実績の差による違いは認められなかった。しかし、「F5: 向上性」については競技実績上位者と下位者の間に有意な差が認められた。競技実績の高い競技者は全体的にモラルが高いであろうと予測し

ていたのであるが、実際に差があったのは自らの競技力向上に深くかかわる「F5:向上性」についてのみであった。そして部全体のマネジメントにかかわる第1、2、3、4因子については、競技実績の違いによる差は認められなかった。つまり競技実績の高い選手は、「よりレベルの高い競技会に出たい」とか「技術指導をしてほしい」などのどちらかという個人にかかわる「F5:向上性」が高いと考えられる。しかし、高校陸上競技部においては部員の競技レベル、部活動を行う意義、目的は多種多様である。競技実績の高い選手が「F5:向上性」について高い傾向にあるからといって「F5:向上性」の向上にのみ目を向けるべきではないのは当然のことである。

表8. 競技実績別因子スコアの比較

因子	全国大会入賞	ブロック大会入賞	県大会入賞	地区大会入賞	入賞経験なし	F-値	P	
F1:一体感	-0.070	-0.225	0.089	-0.019	0.051	1.293	0.546	N.S.
F2:目標達成	0.264	0.045	0.043	-0.201	-0.045	2.320	0.788	N.S.
F3:人間関係	-0.721	-0.151	0.060	-0.028	0.116	1.143	0.337	N.S.
F4:合理性	-0.125	-0.083	0.168	-0.342	-0.057	1.563	0.184	N.S.
F5:向上性	0.197	0.173	0.170	-0.334	-0.346	3.277	0.013	*
N	5	44	94	26	46			

* P<0.05 N.S. no significant

IV.まとめ

本研究は高等学校陸上競技部員を対象に、陸上競技部のスポーツ集団としての特性とモラールとの関係から、競技的スポーツ集団としての高校陸上競技部のモラールの機能について検討を行った。結果は以下のように要約される。

1. 男女間でのモラール因子スコアの比較では、男子は女子に比較して全体的に因子スコアが高く、男子のほうが技術を向上させ、試合で良い成績をとりたいという意欲が強いと考えられる。
2. 学年間の因子スコアの比較から、学年が進むにつれてモラール因子が低くなる傾向が認められる。また1年生は「人間関係を重視し、部全体が一体となって、部の目標を達成しよう」という姿勢が強く認められるが、2、3年生についてはそのような傾向があまり認められず、部全体のことよりも個人を重視する傾向があるのではないかと考えられる。
自ら目標や課題が設定できるようになっていると思われる2、3年生に対してはもっと部全体に配慮させるような1年生とは異なるマネジメントが必要である。
3. 競技成績の高い学校のモラール因子は全般的に高く、モラールの高さが競技力向上と結びついていると考えられる。モラール因子の低い学校はリーダーシップ因子についても全体的に低いことが認められ(筆者2010)、リーダーシップとモラールとの強い関係が窺われる。
4. コーチからの影響については、男女間での違いはないが、コーチから強い影響を受けているほど、モラールが高いことは明らかである。
5. 競技実績の違いによる差は「F5:向上性」のみ認められた。つまり競技実績の高い選手は、「よ

りレベルの高い競技会に出たい」とか「技術指導をしてほしい」などのどちらかという個人にかかわる欲求が高いと考えられる。

これらの結果から、高等学校陸上競技部における部員のモラルについて明らかにすることができた。本研究の結果から、現状の高等学校陸上競技部の指導に関するポイントを指摘することができる。

高等学校陸上競技部は学校の特色、環境、部員の特質などによって異なる集団であり、競技に対する考え方も異なっている。また学校教育の一環として行われているため、コーチ（顧問教師）に影響される部分も大きい。実際、コーチから強く影響を受ける選手のモラルが高いことが明らかとなった。モラル因子スコアの高い学校が競技成績も高い傾向にあることから、モラルを高めるマネジメントが競技力向上の点から、また円滑に部を運営するといった観点からも必要であろう。しかし大学に比べ学年間における体力差が大きかったり、競技について様々な考え方を持つ部員が混在している集団であることが多い高校陸上競技部でどのようにしたらモラル因子を高めることができるかについては、現場の指導者に委ねるしかない。学校運動部は競技力向上だけではなく、活動そのものに対しても喜びを感じさせる指導が求められていることは当然のことである。つまり高等学校陸上競技部におけるリーダーは、競技に関するトレーニング・技術指導だけではなく、スポーツマネジメントに対応できる能力が必要である。今回は指導者のパーソナリティーを無視してモラルの特徴だけを検討したが、モラルの観点からもスポーツマネジメント能力の向上が競技力の向上にもつながっていくと考えられる。

引用・参考文献

Chelladurai,P., Saleh.S.D.(1980) Dimension of leader behavior in sports. Development of leadership scale. *Journal of Sport Psychology*, 2:34-45

井田国敬 (1967) 強い運動部集団の機能特性について. *体育学研究* 11-5 : 55

賀川昌明 (1983) スポーツと競技の心理. 大修館 : 234

松原敏浩 (1990) 部活動における教師のリーダーシップスタイルの効果. *教育心理学研究*, 38 : 312-319

松田岩男 (1975) スポーツ科学講座 6 スポーツの心理. 大修館 : 131

松田岩男 (1983) 体育心理学. 大修館 : 362

三隅二不二 (1973) リーダーシップ行動の科学. 有斐閣

永井純・佐々木秀幸・高井和夫・西野美紀子・大庭恵一 (1998) 陸上競技指導者のリーダーシップに関する研究. *陸上競技紀要*, 11 : 10-22

丹羽劭昭 (1976) 運動心理学入門. 大修館 : 221

丹羽劭昭 (1972) 運動部におけるモラル. *体育集団の研究*, タイムス : 376

野崎武司・植村典昭 (1989) リーダーシップの構造づくり行動がスポーツチームに及ぼす効果. *体育・スポーツ経営学研究*, 6 : 1-9

佐藤正伸・長堂益丈 (1995) 競技者の競技意欲に対する指導者の影響. *陸上競技研究*, 12 : 34-43

- 杉山歌奈子 (2000) 競技スポーツ集団におけるリーダーシップ研究. 日本女子体育大学修士論文
- 竹村昭、丹羽劭昭 (1963) 運動部のモラルの研究. 体育学研究 12-2 : 77-83
- 鶴山博之 (2010) 高校陸上競技部のリーダーシップに関する研究. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 36 : 53-62
- 鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一 (1994) モラルから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 7 : 29-35
- 鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一 (1996) リーダーシップから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 9 : 21-30
- 鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一 (1997) 競技的スポーツ集団としての陸上競技部の指導に関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 10 : 25-33
- 鶴山博之・畑攻・杉山歌奈子 (2001) 競技的スポーツ集団におけるリーダーシップの固有性・個別性に関する研究. 体育・スポーツ経営学研究, 16 : 29-42
- 内海和雄 (1998) 部活動改革. 不昧堂出版 : 191